

とやまの考古学を築いた先覚者たち

敬和学園大学人文社会科学研究所 客員研究員 藤田富士夫

とっておき埋文講座②

はじめに

40周年を迎えた富山県埋蔵文化財センターは、行政が専門的に考古学をやっていく中で、都道府県立では全国で一番目にできました。富山県の考古学、埋蔵文化財行政を牽引してだけでなく、全国の考古学関係者が多く視察に訪れています。

地域考古学の先達

明治以前の先達に宮永正運（みやなが せいうん 1732～1803）がいます。砺波郡下川崎村（現小矢部市）の豪農の家に生まれ、『私家農業談』を書き、農学者として知られています。他に『越の下草』があり地誌的内容の中にみえる考古学的知見は重要です。実査に基づく記述は価値を高めています。なかには、「石黒郷西勝寺村（現南砺市福光町川西）山中には方僅か六尺計の正円なる穴三つも五も並ぶものあり。是は往古の墓所ならんか。」とあって、横穴墓の存在を示唆しています。これは現在同町に横穴墓が知られていないので、ここに注意したい。明治の頃には横穴墓は人々が生活した痕跡と言われていました。宮永は明治の頃の学者が考えたことよりもはるかにその性格を読み解いていたようです。

宮永と同じころの資料に富山市婦中町の自清道人（じ せいどうじん ～1804）という方の記録があります。半紙をつなぎ合わせて長さが1m74cmの紙に石棒や石冠、独鈷石（どっこいし）などが描かれてます。ほぼ中央右に描

いてある石冠の実物が現在も残っていることが分かっており、1800年代の初期に描かれたものと見比べることができます。

こういった資料の描き方や自清道人を調べていくと、近江の奇石収集家、木内石亭（せきてい 1725～1808）との関わりがあったことが分かってきます。木内石亭は「石の長者」とも称されています。小さいころから石が大好きで、いろいろなところをまわっています。全国の都道府県30か所を訪れています。江戸時代にこれだけ日本各地を回っているということは大変すごいことです。この人の名声はいろいろなところに届き、自分の石を見てほしいといろいろな人がやってきます。

江戸時代は土農工商の身分制度がしっかり定まっている時代だが、庄屋さんや商人などいろいろな人が教えを乞いにくるようになります。著書の中に富山（越中）の自清道人が訪ねてきたと書いてあり、指導を受けていたことが分かります。木内石亭は集めるだけではなく記録に残すことを行っていて、『雲根誌』を著しています。木内石亭と自清道人の図の描き方がまったく同じです。すなわち、この時代の考古学というのは図を描いて「自分はこういうものを持っているよ」というのを見せ合うことだったようです。

いろいろなものを持ちよって、全国レベルで交換もしています。その中心となっているのが農民や庶民であるということ。でこういう人たちのことを考古学者・森浩一先生は町人学者と呼んでい

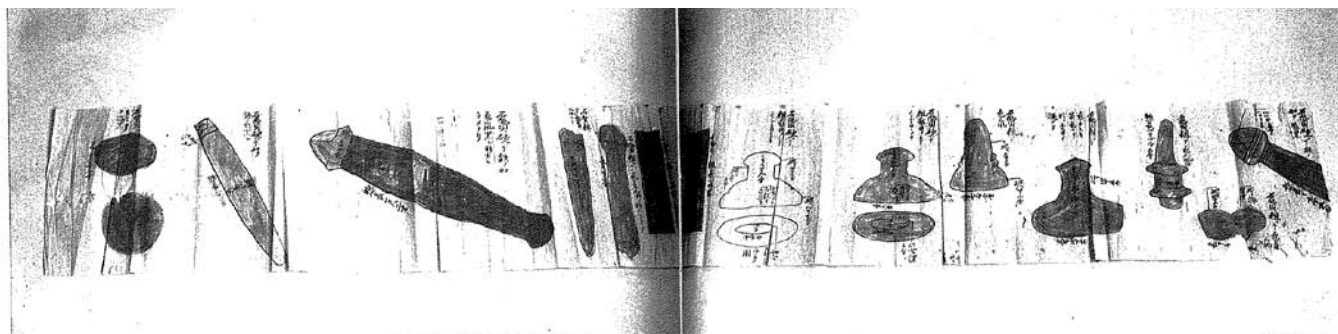
ます。考古学の原点は町人が自分の独自の資料を元にして研究を深めていくということにありそうです。

はやかわしろうさく

早川莊作（1888～1978）



早川莊作先生は、富山考古学界の草分けという位置づけになります。世の中が考古学について関心のない大正から昭和時代にかけて、一人黙々と県内各地の遺跡を踏査し、膨大な遺物を収集されました。その間、著述に講演そして後輩指導にあたり、富山考古学研究の基礎をつくり、戦後は富山考古学会を創設されました。遺物は県に寄贈され、富山県埋蔵文化財センターで「早川コレクション」（大半は、平成20年（2008年）に「越中地域考古資料」として国登録有形文化財



石器絵図（24cm×174cm）

中央一部写真重複一

（浅野興太郎氏蔵）

に登録)として公開されています。

明治41年東京大学教授坪井正五郎が来県し、それに随行したことから考古学の道に入られました。当時、早川さんに随行を勧めたのは、魚津中学校の先生で山歩きをしながら鉱物学的なものや植物を見るなどし、山岳に関する分野の先駆者でもあった吉沢庄作さんでした。

当時の考古学は、遺跡を歩いて、何か畑に落ちていないか探しながら歩くということをやっている、私としては、考古学をやるということは「歩けオロジー」だと思っていました。「歩けオロジー」とは、考古学を英語で a Archeology (アーキオロジー) というのをもじったものです。昭和40年代は在野の考古学者というか、大学とかに籍をおかない考古学者が多くおられました。たとえば、旅館を営んでいた、長野県上諏訪の藤森栄一さんがいます。私は藤森さんが書かれた『かもしかみち』という本を高校時代に読んで考古学をすることに感銘を受けました。大学時代には実際に藤森さんの旅館「やまのや」に泊まりにも行きました。自分の足で遺跡を歩いて遺物を拾い、書物で調べるを繰り返して考古学に入った一人です。

大正15年、『越中石器時代民族遺跡遺物』(中田図書)という本を出版されます。図は以前の自清道人と同じ方法で描かれています。東京帝国大学文学部嘱託の柴田常恵が序文を寄せ「早川莊作氏は越中に於ける石器時代遺物の熱心なる蒐集家で多年の努力は其数量の豊富なる上に、學術的価値の貴重なるもの少なからず、氏の蒐集品に依らざれば越中の石器時代に就ては到底十分の知識を得られざるは勿論、廣い意味に於ける我石器時代のことにても氏の蒐集品に依つてのみ解決せらるべきものがある。特殊なる越中に異常なる氏の在るは地と人と並に宜しきを得、其散逸を防ぎて學界に寄與されたこと多大なるは深く感謝する處である。また氏は一面に於て研究者の立場に在ることを忘れず、所謂異種珍品を蒐集して其慾を充たし、次て自ら娯むが如きことなく、遺蹟遺物に接するに際し常に研究的態度に出でて考察に力め、其解決に至るまでは幾度も沈思熟慮して止

まれないものがある。されば家庭の事情に依って地方に居らると誰も、将来ある斯學の研究者として優に其地歩を占めらるるは密に敬服に堪えない。」と著わしていることから優れた考古学者であったことが分かります。

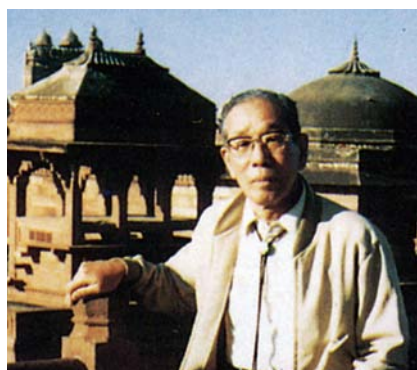
その後、昭和11年に『越中史前文化』(中田図書)、昭和37年に『富山県の石器と土器』(清明堂)という本を発行しておられます。『富山県の石器と土器』にはたくさんの写真のページがあり、それらは写真館の人が何日間も家に通って撮ったもので非常に資料的な価値が高いものになっています。

富山市の北代遺跡の土偶と黒部市の田家遺跡の耳飾は大変気に入っておられるようで、20年間、毎年賀状スタンプに使っておられました。この3部作は富山県内の様々な方に影響を及ぼしています。次に代表的な方を2人紹介します。



昭和45年 早川先生からの年賀状

もりひで お
森秀雄 (1923~2002)

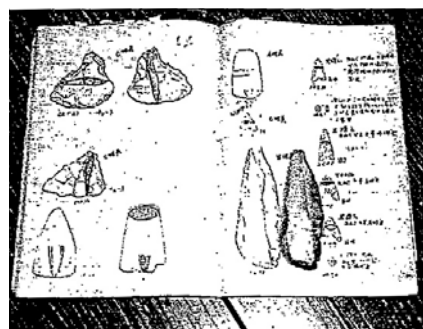


大正12年上市町に誕生されます。12歳にして小学校の展覧会で石器や土器

を展示したという記録があり、小学生のときから考古学を志していることが分かります。昭和18年、20歳のときに教師として船舩国民学校へ赴任し、直坂遺跡で遺物を採集しておられます。昭和19年に舞鶴海兵団に入隊し、その後復員し白萩西部国民学校や白萩中学校(上市町)に勤務され、その間に丸山遺跡で遺物を採集しておられます。さらに、自分の歴史教育を見直そうとたくさんの学会に入会して勉強されています。

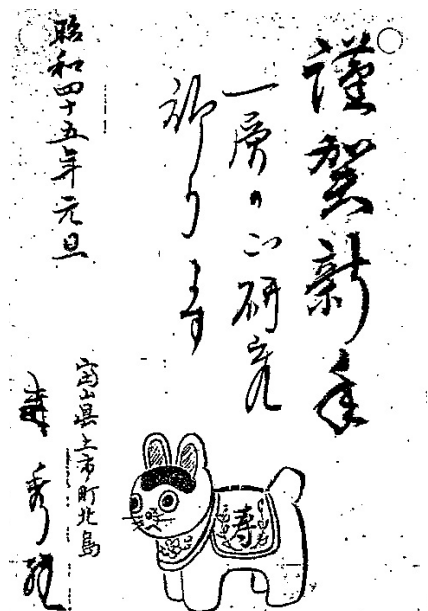
昭和26年、28歳の時に『大昔の富山県』(清明堂)という本を出されました。これは富山県の考古学界にとって稀有の本であると言えます。「はしがき」には「日本の歴史を、新しい眼で、見なおさなければならない。ということが終戦後、人々の口にのぼってきました。特に神代といわれる頃の歴史について、もっと科学的に、正しく研究しなければいけないという事になりました。そこで、大昔の人々が生活した場所や、種々の道具など、つまり遺蹟や遺物を資料として研究する考古学が非常に盛んになってきました。」と書いておられるように、新しい眼で見直さなければならないという思いが強かったことがわかります。

昭和30年に眼目新(丸山)遺跡の調査を早川莊作先生と慶応大学の江坂輝弥先生とで行っています。このときに8点の石器を慶應大学にもっていかれ、昭和34年に『日本考古学年報8』誌上で富山県に旧石器時代の遺跡があるということが初めて明らかにされました。現在この8点の石器は上市町で保管されています。



森先生発見(S23.6.30)の丸山遺跡出土石器と当時の実測図

実は、別に森先生の手元に昭和23年発見の丸山遺跡の資料があります。日本の考古学において旧石器が見つかったのは昭和24年の群馬県岩宿遺跡が最初といわれていますが、それ以前に森先生が石器を採集していたことが分かります。これは、学術的にも貴重な資料と言えます。



佐度忠作 (1910~1966)



明治43年に黒部市に誕生されます。昭和16年に前沢国民学校に赴任し、初めて『一般と郷土の石器について』を書かれました。その後いろいろな学校をめぐる、昭和32年に退職され、昭和37年から41年にかけて、『黒部市における先史文化の概観』『田家遺跡』『坪野遺跡試掘について』『坪野下段遺跡A地点



佐度忠作 (杉野佳子・牧野正雄編)『石器時代遺跡踏査日誌』平成6年

調査報告書草稿』と、黒部市と宇奈月町を中心に精力的に報告書を書かれました。昭和41年9月21日に亡くなられます。亡くなられた後、『宇奈月町の石器と土器』という本を宇奈月社会科学研究会の方々が出版されました。見取り図、断面図、包含状態をしっかりとまとめておられたことが分かります。

佐度先生は遺跡を回られると記録を丁寧にまとめられます。「遺蹟をめぐる」のノートでは、追記もしっかりしておられます。私は小島俊彰という縄文学の大先輩の方に、「佐度先生の記録の仕方が素晴らしい」ということを高校時代に聞き、佐渡先生のご自宅へ直ぐ行き、アドバイスを受けました。その時のエピソードを一つ。部屋の鳥居龍蔵先生の全集が並んでいる本棚を見ながら「ぼくはもういないんだけど」と言われたけど、あげるとは言ってくださりませんでした。後から知ったのですが、この時

はかなり体調が悪い時期であったそうです。それにしても56歳というのはあまりにも若すぎました。

終わりに

ここに私の印象に深い富山県の考古学を築いた先覚者たちの業績を概観してみました。宮永正運や自清道人は黎明期を飾る先達です。彼らは町人学者として土中から出土した遺物について、それを人工物と認める深い知的洞察を行いました。今日でも遺物を見つける、あるいは発掘するとキメキメを感じます。

私が考古学を始めた頃の「歩けオロジー」は好奇心と未知のモノとの出会いを満たしてくれるものであったし、理屈抜きでその精神には心地良いものがありました。

一方で、戦後急速に考古学の資料を歴史資料と明確に認識する研究が進んできました。私が知己を得た早川莊作、森秀雄、佐度忠作先生は、その端境期で遺跡や遺物と向きあった先学です。いずれも考古学資料と正面から向き合い模索し呻吟し格闘されてきました。その痕跡は、自ら図面を描いて記録された資料や報告の一片一片に残されています。貴重な報告や資料からは折々の息遣いを感じられます。今日の富山の考古学は、これらの先覚者が手ずから築いた礎の上にあります。「温故知新」は早川莊作先生が好んで揮毫した言葉です。今、改めて感じるところがあります。

(平成30年2月4日 第7回 県民考古学講座)

